合掌造民家（がっしょうづくりみんか）

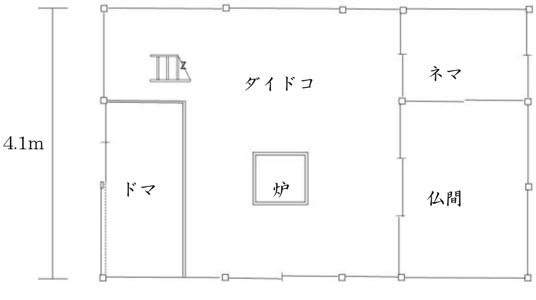
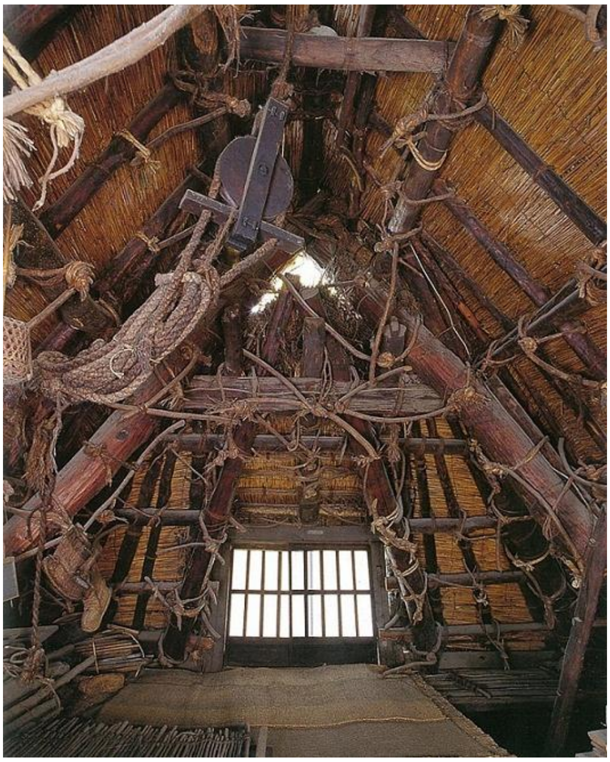
種　　別	小松市指定文化財　建造物
指定年月日	昭和 40 年 11 月 3 日
所　在　地	殿町

天正２年（1574)、一向一揆に焼き討ちに遭った越前平泉寺[1]の僧兵の一部が、大日峠を越え、木地小屋（現在の小松市新保出）の手前２キロメートルほどの地点に、甲（かぶと）という村落を作った。この民家はその甲村落で建造されたものとみられる。家の梁には「天正１４年４月」と墨書があり、その頃に造られたと思われる。

明治元年(1868)に須納谷（すのたに）（現在の花立町）に移築され、ついで昭和 36 年(1961)に現在地に移された。

間取りは、ドマ、ダイドコ、ネマ、仏間に区切られ、天井裏には簀子（すのこ）張りのアマと呼ばれる倉庫スペースがある。棟木や叉首（さす）[2]、柱、梁にはブナ材が、床や腰壁には杉材が使用されている。また釘など金物は一切使わず、縄での結束や溝へのはめ込みで接合している。前面には下屋（げや）があり、玄関ドマ、水舟、チョウズ、モノオキがあったが撤去された。

この家は家族の住居としては小さすぎることから、冬期を除く出作り小屋と考えられる。

（1）平泉寺：白山の越前側の上り口に開かれた白山信仰の拠点寺院。最盛期には数千の堂院が立ち並んだが、天正２年に一向一揆に敗れ全山が焼失した。

（2）叉首：梁の上で逆Ｖ字型に組み、棟木を支えるための材。